

# 大戦前夜 記者たちの学びや

戦前の1932（昭和7）年から11年間存在した日本初の本格的記者養成学校「新聞学院」の機関誌「学報」がこの春、73年ぶりに復刻出版された。当初は米国の大学でのジャーナリズム教育を参考に「言論の自由」も論じたが、日本が戦争への道を突き進む中、新聞も戦争協力へ追い込まれていく軌跡をたどれる資料となっている。



山根真治郎

「やまねよしみさん提供」

## 「新聞学院」機関誌、73年ぶり復刻 戦争協力への軌跡克明に

新聞学院は、国民新聞編集局長などを歴任した新聞人・山根真治郎（1884〜1952）が三井財閥の援助で設立。32年に東京・神田三崎町で開校し、学院長に就任した。その後銀座に移り、太平洋戦争開戦翌年の42年に閉校されるまでに、国内だけでなく朝鮮や台湾などの大学生や新聞社員ら332人が卒業し、約200人が新聞記者などジャーナリストの仕事についた。

### 「今こそ読むべき記録」



（左から）大久保謙さん、やまねよしみさん、松野良一・中央大教授＝東京・本郷

授業は夜間制で、修業年限は1年。米ミネソタ大学のジャーナリズム教育を参考に、朝日新聞主筆の精方竹虎、国民新聞を創刊した徳富蘇峰ら新聞各社幹部や一線記者が教壇に立った。新聞の歴史や記事の書き方に加え、広告や販売、技術など全般を教えた。時局講義では「満州国」の実態を調べた国連のリットン調査団などもテーマとされた。新聞学院の機関誌「学報」は11年間で33冊発行。新聞社幹部の論文や学生の作文を掲載した。当初は米国での「言論の自由」や独ナチス政権下の新聞統制などが論じられた。だが36年に新聞用紙が統制品目となり、38年に国家総動員法で新聞発行禁止が規定されるなど政府の新聞統制が強

まると、「学報」でも、新聞の意義を「国民を指導し国家目的に協力する」と説く論文章が増えるなど、戦争協力への傾斜が益濃くなっていった。ただ、山根学院長の娘婿

東京都の会社員大久保謙さん（31）は中央大総合政策学部在学中、同大の同窓会名簿をもとに、生徒出陣など戦争を経験した先輩らの証言を聞き書きし、ゼミ仲間と「戦争を生きた先輩たち」（中央大出版部）を10年に出版した。その中で、大学の先輩にあたる山根康治郎さんが戦時中、朝日新聞記者時代に通った新聞学院のことを知った。その後、戦前の記者教育の実情を調べようと、東大や日本新聞博物館などに保管されていた新聞学院の「学報」を読み込み、10年に修士論文にまとめた。

孫・山根雄一郎さん（66）は20冊のうち29冊の存在を確認し、この2月、復刻版全4巻が不二出版から出版された。大久保さんを指導した松野良一・中央大教授（メディア論）は「戦前の新聞学院がたどった足跡は、戦後70年を迎えてメディアへの統制が話題になる現代にこそ、改めて語られるべき記録だと思う」と話している。（編集委員 北野隆一）



学報

新聞学院十年記念

1941（昭和16）年3月発行の新聞学院機関誌「学報」の新聞学院10年記念号表紙。当時東京・銀座にあった新聞学院の建物写真が掲載されている。

※朝日新聞社に無断での転載はご遠慮ください。